

ブルシェンシャフトとゲーテ

田 中 暁

ブルシェンシャフトとは

1815年6月12日、イエーナに143名の参加者を得て、新しい学生団体ブルシェンシャフト (Burschenschaft) が設立された。ドイツにはこれまでも同郷の学生が集うランツマンシャフト等の学生団体があったが、互いに争い決闘騒ぎにいたることもまれではなく、その悪習には批判が集まっていた。小国分立にもとづく偏狭な郷土愛がその背景にあった。フィヒテ、シラー、そしてゲーテもかかる状況を快く思っていなかったが、決定的対策を講ずることはできないままであった。ここに設立されたブルシェンシャフトは、個々の団体が互いに対してもっていた対抗心をすて、より高い理想のために学生がひとつにまとまろうとするものである。この初期ブルシェンシャフトは、のちのブルシェンシャフトと区別して Urburschenschaft と呼ばれる。

さて設立の当日、参加者一行はまずマルクト広場に集合、行進しながら旅館「ツァ・タンネ」に向かった。ここで設立記念祝典が挙行された。最初に愛国の詩人エルンスト・モーリツ・アルントの歌「時もよくわれらひとつとなれり」を歌った。つづいてカール・ホルンが発言して、これまでの分立主義を廃して学生の統一組織をつくるというブルシェンシャフト設立の目的を語った。幹部9名と委員21名が選出された。このなかには解放戦争から帰還したばかりの者もいた。勇猛をもって知られるリュッツォウ義勇軍の軍服の色である黒・赤・金がブルシェンシャフトの旗印とされた。団体設立にさいして指導的役割をはたした11名のうち8名がリュッ

ツォウ義勇軍に属していた。

1806年10月9日プロイセンはフランスに宣戦布告するが、10月14日イエーナ・アウエルシュテットの会戦でナポレオン軍に壊滅的敗北をきつする。10月27日ナポレオンはベルリンに入る。当時ベルリンにいたフィヒテ (Johann Gottlieb Fichte) は外国人支配下に住むことを嫌い、ナポレオン軍侵攻を前にケーニヒスベルクに逃れる。1807年7月9日ティルジットの講和が成り、プロイセンは領土の半分を失った。1807年8月、ベルリンにとって返したフィヒテが、翌年にかけての冬、身の危険をかえりみず渾身の力をこめて講じたのが『ドイツ国民に告ぐ』であった。その眼目は、外国人支配から脱し、ドイツ国民の自立する道を示すことにある。第一講に言う、「自立を失ったものは、同時に時代の流れに介入し、その流れの内容を自由に決定する能力をも失っています。そのような状態にいつまでもとどまっているならば、そのものは自分の時代を、そして時代とともに自分自身をも、自分の運命を支配する外国権力によって処理されてしまうのです」¹⁾。

そのほかブルシェンシャフトに精神的に影響を与えたのは、解放戦争時のゲレス、アルントらのいわゆる愛国的文芸、ヤーン (Friedrich Ludwig Jahn) の体操運動であった。ヤーンは、ナポレオン支配下にあつて体操によるドイツ国民の精神と肉体の鍛錬を提唱した。1811年にはベルリンに体操場をつくった。ヤーンもまた旧来のランツマンシャフトには批判的であった。体操運動のかかげたドイツ統一の目標は学生たちの理想となる²⁾。

イエーナのブルシェンシャフトと大公国との関係は良好であった。ブルシェンシャフトはザクセン＝ヴァイマル＝アイゼナハ大公国を民主的な国家と見たし、大公国はブルシェンシャフトによって、それまで学生団体もっていた悪しき風習を一掃できると期待したのである。カール・アウグスト (Carl August) はブルシェンシャフトに対して寛大な態度をとり、これを支援した。ゆえに大公は、敵対する勢力からは「年寄り学生」と揶揄されることになる。

解放戦争

1812年夏、ロシア征服の野望にもえるナポレオンは50万の大軍をひきいてモスクワをめざす。ナポレオン軍とはいいながら、そのうち三分の一はドイツ人の軍隊、すなわちライン連邦軍とプロイセンおよびオーストリア軍であった。彼らがナポレオンの指揮下で戦うことをいさぎよしとしなかったのは言うまでもない。同年冬、ナポレオンが雪のロシアからの退却を余儀なくされた12月30日、プロイセン軍司令官ヨルクは独断でロシアと協定をむすび、軍団を中立化して戦列から離脱した。翌13年1月オーストリアも中立を宣言、2月にはプロイセンとロシアの間に同盟が締結される。一般兵役義務が布告され、志願兵団、義勇軍が生まれた。3月16日、対フランス宣戦布告。25日にはシュタイン起草のカーリッシュ宣言が普露両国王の名で布告された。そこにはライン連邦解散と統一されたドイツ帝国の再興が約束されていた。この一連の流れで中心的役割をはたしたのはシュタインであり、アルント、ゲレスが彼と行動を共にした。志願兵や義勇兵が集まってきてナポレオン打倒の士気は高まった。

しかし道は平坦ではない。13年春、普露同盟軍はナポレオンに敗北、6月には一時休戦となる。ここでオーストリアが巧妙に立ちまわり、外交上の指導権をにぎってしまう。メッテルニヒは双方の仲介を試みるが、ナポレオンはこれを拒否。8月11日、オーストリアは同盟軍に加わる。1813年10月18日、プロイセン、ロシア、オーストリア、スウェーデンの同盟軍はライプツィヒ近郊においてナポレオン軍を撃破、ナポレオンはパリに敗走した。世にいう「諸国民戦争」(Völkerschlacht bei Leipzig)である。この結果、ライン以東のドイツは解放された。勢力均衡をはかりフランスがあまりに弱体化することを好まぬメッテルニヒは、ライン河を自然国境としようとしたが、ナポレオンはこれを受け入れない。アルントの有名な詩「ラインはドイツの河にして、ドイツの国境にあらず」は、このときの策動にたいする反発から生まれたものである。ゲレスは「ラインのメルクー

ル」において打倒ナポレオンの論陣をはった。戦場はフランスへと移り、1814年3月30日パリ開城。パリ条約に謳われたのは、国際会議の開催と「ドイツ諸国は独立であるとともに、連邦制的鞆帯によって統合される」ということである。

1815年ドイツ連邦成立。新体制は国民国家の創設ではなく、邦国のゆるやかな結合体である国家連合制となった。同年5月にはドイツ連邦規約が調印された。19世紀前半のドイツでは、オーストリアとプロイセンが協調しつつ、革命再発の防止と自由主義・ナショナリズムとの対決がはかられた。ナポレオン支配下にあった西南ドイツ諸邦では立憲化するなわち憲法制定と国会創設が企てられていたし、プロイセンでも1815年までの憲法制定が公約されていた。ウィーン会議出席者のあいだでも立憲化は抗しがたい潮流とみなされた。

ドイツ連邦規約13条には「連邦を構成するすべての個別邦国には、ラントシュテンデ制が施行されるであろう」とある。これは各邦の将来の国会創設を予期させる条項であるが、あいまいな表現であり、解釈の余地を残している。問題はラントシュテンデ(本来は中世末の等族議会制)の解釈である。自由主義者がこれを選挙による国民代表が国の立法に参加する議会制度と解するのに対して、メッテルニヒ等の保守派は旧等族のような特権諸身分代表と解した³⁾。このようにして統一国家をつくるという諸侯の約束は守られないままに、とくに最前線で戦い多くの犠牲者を出した学生たちの間に不満が高まっていった。

1813年のゲーテ

ゲーテは解放戦争の間も保守的な姿勢をくずさなかった。1813年4月、プロイセンをはじめとする連合軍がヴァイマルにはいり、フランス兵が撤退したとき、ドイツ全土が熱狂するなかにあつて、ゲーテは留守を夫人と息子にまかせて、予定を早め湯治に出かける。10月オーストリアの将軍を迎えたさいには、フランスの勲章をつけてあらわれた。ナポレオンを讚美

しているゲーテは、ナポレオンからもらった勲章をもっとも大切なものとみなしていたのである。11月、息アウグストが志願兵となったことを知ったゲーテは、カール・アウグスト大公に懇願して息子の志願兵入団を免除してもらおう。そのようなゲーテであるから、祖国ドイツが敗北したときの悲しみ、解放されたときの感激を人々と共有することはなかった⁴⁾。

1813年12月、イエーナ大学教授ルーデン (Heinrich Luden) は雑誌「ネメジス」の刊行計画について助言をもとめるべくゲーテを訪問した。ゲーテは、公人としての自分は雑誌刊行に何も反対しないが、もっと前に個人的に相談してくれていたなら、そのような計画はやめて専門の歴史学にもどることを勧めていただろうと言い、ナポレオン反対、フランス反対の雑誌を発行することは、やがて王権とぶつかることになろう、この世の偉大で高貴なものすべてに敵対することになるだろうと警告した。自分は大公家を不快な目にあわせたくないし、政府を厄介な交渉事に巻き込ませたくないのだ、大学が不利益をこうむらないように守りたいのだ。ナポレオンを打ち負かしたとしても、わが民族は目覚めたと言えるのか。フランス人が去ったあとには、コサック兵、クロアチア人、マジヤール人などが来るのではないか。なんら情勢は変わらないではないか。ルーデンはゲーテの言葉におどろきながらも、この大人物に感動させられている。「ゲーテには愛国心がない、ドイツの心情も、わが民族を信じる気持ちもない、ドイツの名誉不名誉、幸不幸に対する感情もないとゲーテを責める人は、大間違いをしている」と述べて、ルーデンは時代に対するゲーテの沈黙はいたましい諦念にほかならないのだとしている⁵⁾。

ゲーテには元来あたらしいものに対して、それが既存の秩序を脅かすのではないかと警戒する傾向がある。ゲーテはナポレオン支配下のほうが、むしろドイツ文化を守ることができると考えていたのではあるまいか。

出版の自由

ザクセン＝ヴァイマル＝アイゼナハ公国は、1816年5月5日新憲法を制

定した。対ナポレオン解放戦争時に諸侯がなした約束を実行に移したのである。この結果、出版の自由が認められたが、このことがこののち悩みの種となる。当時の出版物のいくつかを挙げるならば、まずルーデンが1814年に創刊した「ネメジス」(Nemesis)がある。ルーデンが刊行計画についてゲーテの助言を求めたことは、上述のとおりである。「ネメジス」は、ドイツ統一、憲法、法制度の改革等を要求し、プロイセンが連邦規約にある憲法制定を守らないことを批判した。ルーデンがブルシェンシャフトの促進者のひとりであったこともあり、ブルシェンシャフトの活動を弁護した。オーストリア、プロイセンの二大強国が態度を硬化させればさせるほど、1817年以降、最初中庸を得て落ち着いていた雑誌の調子もけわしくなっていた。

ベルトーフが創刊した「オポジツィオーンズブラット」は「専制主義、貴族主義」にも「過激共和主義」にも反対する新聞であった。他の国では禁止された雑誌もヴァイマルに入ってきた。もとゲレスの創った「ライン・メルクール」は、憲法を要求してプロイセンで禁止となり、イエーナに移り「新ライン・メルクール」となった。

もっとも問題があったのが、オーケン (Lorenz Oken) が1816年に創刊した「イージス」(Isis)である。オーケンは1779年生まれ自然科学者・自然哲学者で、1822年には自然科学・医学の学会を設立した。1807年イエーナ大学教授となるが、1815年以降はげしい政治闘争をおこない、ヴィーン、ベルリン、ヴァイマルの政府に要注意人物としてにらまれた。プロイセンの諸規定を反動的と批判したため、プロイセン王がカール・アウグストに抗議したこともあった。またオーストリア警察国家を嘲笑した結果、ハプスブルクの国で発禁となった。野心がつよく、自然科学の学問としての独立をめざすオーケんと、ヴァイマルにおける自然科学関係事項の権限を有するゲーテとの間にあつれきがあったことは明白である。学問上の発見について優先権の争いもあったとされる⁶⁾。

「イージス」はもともと自然科学雑誌であったが、政治的な色彩をつよ

く帯びている。「出版の自由」を利用して当局を批判する記事を掲載する。急進的共和的路線をとり、一般的には賞賛されたヴァイマルの憲法をもきびしく非難した。これに対してゲーテは「声高に出版の自由を求める者は、それを濫用しようとする者にほかならない」⁷⁾と指摘する。カール・アウグストから所見を求められたゲーテは、1816年10月5日「イージス」は発禁とすべし、ただしオーケンの懲戒処分には反対との立場を表明した⁸⁾。ゲーテは、オーケンが自分の分をわきまえて自然科学の領域にとどまっていたならば、そして政治にあれほど首をつっこまなかったならば、学界にすぐれた地歩を固めていただろうにという趣旨の詩をつくっている。ゲーテやフォークトを悩ませたのは、出版の自由から生まれたこうした輩、「イエーナの俗物教授ども」⁹⁾であった。二人にとって、出版の自由の無節操に立法の手段でどう対抗できるかは大問題であった¹⁰⁾。ゲーテはのちに当時を振り返って、自分は「出版の自由という不法」に反対したと回想しているし、出版の自由を制限することを好ましいと述べている¹¹⁾。ブルシェンシャフトやヴァルトブルク祝祭に対するゲーテの関係を考察するさいに、出版の自由の問題は重要な意味をもってくる。

祝祭の計画

1816年のある秋の日のこと、ふたりの学生カール・ホフマンとハンス・フェルディナント・マースマンはハイキングの途中、宗教改革三百周年にあたる1817年をライプツィヒ戦勝四周年の記念祝典とともに祝うということをついついた。宗教改革という「内的解放」と解放戦争という「外的解放」とを結びつけようというのである¹²⁾。ふたりはこの考えをまもなくイエーナに持ち帰り、学生たちの間に大きな反響を引きおこした。ところで、ヴァルトブルク祝祭の考案者としてはクリスティアン・エドルアルト・レオポルト・デュレも自分であると主張しているが、マースマンにせよ、デュレにせよ、ともにヤーンの弟子であるから、背後にはヤーンがいるのである。祝祭の案がヤーンの精神から出たものであることは間違いない。

1817年8月11日付でイエーナからヴァルトブルク祝祭への招待状が発送される。「本年は宗教改革記念の年にあたり、各地で祝典が予定されていることから、われわれもまた勇敢なるドイツ・ブルシェン全員とともにわれわれなりに祝典を挙行しようとするものであります。—しかしながら他の祝典と重なってこれを妨害することのなきよう、またライプツィヒ戦勝祝典もこの時期にあたるので、祝祭を1817年10月18日アイゼナハ近郊ヴァルトブルクにて執りおこなうことで一致いたしました」。そうして宗教改革、ライプツィヒ戦勝、ドイツ・ブルシェン第一回大会という三つの関連においてこの祝祭を催すことを告げている。署名者の法学生ヴェッセルヘーフト (Robert Wesselhöft) はイエーナの出版主フロマン (Karl Friedrich Ernst Frommann) の甥にあたる。フロマンはゲーテと交遊があった。

招待状はヴァイマル政府の許可を得たものではなかった。許可申請がなされたのは、招待状発送後四週間以上を経てからのことである。この間にハノーファー政府からはヴァルトブルクに陰謀の動きありという警告が届いていた。カール・アウグストは、ハノーファーに対しては祝祭は政治的目的をもったものではない旨いんぎんに返事をさせる。その一方でアイゼナハ当局に対しては二つの指令を発した。学生たちには好意をもって接し、城の広間や部屋を開放し勝利のかがり火を燃やすための材木を無償で提供すること、同時に、場合によってはすぐさま介入できるようにアイゼナハ国民軍総動員の準備をしておくこと、以上二つである。学生たちの要求はドイツ統一の確立であった。ひとつの中央権力、学問の自由を民主的基本権利として要求した。

ゲーテはブルシェンシャフトについて「ドイツの学生たちが単一のブルシェンシャフトを設立するということはまったく時代に合ったことです」としながらも、「こうして成立した団体には、前のドイツ帝国は何ひとつ命令はできなかつたし、連邦議会も怖れをいだくにちがいないでしょう」と書いている¹³⁾。ここには新しいものが既存の秩序をおびやかすのでは

ないかという懸念が垣間見えはしないだろうか。それは「出版の自由」により発刊された各種雑誌に対する疑念とも共通するものであろう。

1817年10月、ヴァルトブルク祝祭を控えて若者たちが集まってきた。ゲーテはその様子を次のように書いている、「アイゼナハへ向かう若者たちで周囲が活気づいています、とくにご婦人方は皆興奮しています。アイゼナハへ行きたいと思わないご婦人はいません。それをとやかく言うことはできません。あそこには好ましい若者たちが集まるのでしょうから。私どもとしては静かにして、この冒険的行為の結末を見守らなければなりません」¹⁴⁾。祝祭を「冒険的行為」と呼び、「静かにして、見守る」という言葉にゲーテのブルシェンシャフトに対する態度が如実にあらわれている。ゲーテは祝祭の結果に危惧をいだいた。プロイセン第三歩兵連隊が進駐することについて、「進駐が祝祭にちがった形を与えることになるかもしれません」¹⁵⁾と書いている。

それでもゲーテは学生たちに集会や体操練習のための適当な場所を見つけてやった。ブルシェンのなかにはゲーテの友人や知人の家庭の子弟もいたから、直接会う機会もあった。1817年6月、ゲーテは交遊のあったフロマン家でブルシェンシャフトの指導者たち、リーマン、シャイドラー、デュレ、カール・ミュラーらと会った。

祝祭の経過

1817年10月18日、すがすがしい朝が明けた。8時、町じゅうの鐘が鳴りびびくなか、祝祭参加者はアイゼナハのマルクト広場に集合した。ブルシェンシャフトの総勢450名、これはドイツ全土の学生数の実に50パーセントにあたる。

行列が組まれた。先頭はこの日のために城守にえらばれたシャイドラー、それに4人の城の兵士がしたがう。そのあとをイエーナのブルシェンシャフトの旗が行く。これは1806年の記念祝典のさいにイエーナの婦人たちから贈られたものであって、深紅と黒のピロードでできた幟で、金色の柏の

枝が刺繍してあり、金色の総飾りの縁取りがしてあった。こうして黒赤金の旗が行列の先頭をはためいていったのである。旗手のかたわらを4人の学生が進む。それぞれベルリン、エアランゲン、ゲッティンゲン、マールブルクからの学生で、そのなかに後に重大な事件の中心人物となるザント(Karl Ludwig Sand)がいた。そのあとをブルシェンたちが2人ずつ列をつくって進む。来賓はすでに城で一行を待っていた。4人のイエーナ大学教授フリース、キーザー、オーケン、シュヴァイツァーもいた。「騎士の間」には、町の住民がこの日のお祝いにもってきた柏の枝でつくった環が飾ってある。

祝典はルターの「かみはわがやぐら、わがつよきたて」の合唱ではじまった。それにつづいてリーマン(Heinrich Riemann)が挨拶に立った。その要旨は次のとおりである。ルターは神の信仰の純粹さを再現してみせたが、その信仰は、われわれが祖国の地に立つときにのみ、真にあるべきものになり得る。しかし祖国愛はあまりの長きにわたって有害な世界市民意識に席をゆずっていた。われわれは外国人支配と服従の日々を送っていたが、ついに自由の炎が燃え上がったのだ。あのライプチヒ会戦から四年もの歳月が流れた。ドイツ民族はすばらしい希望をいただいていたが、すべて挫折してしまった。すべてはわれわれの期待とは異なった成り行きとなったのである。こうして彼は憲法制定、ドイツ統一が実現していない現実を嘆く。ただし、「ドイツ諸侯のうち、ただおひとりだけが約束を守ってくださいました。そのお方の自由な国でわれわれは祝祭を催しているのです」。われわれは真実と正義の精神を失わず、同じ祖国の子として内外の敵と戦うのだとリーマンは訴えた¹⁶⁾。

リーマンのあとイエーナ大学教授フリースが請われて短いスピーチをした。騎士の間での祝典は、フリース教授のスピーチのあと神学生エドアルト・デュレが参会者に祝福を与えて閉会した。ブルシェンたちは城の中庭に出て個々のグループに分かれた。歌をうたうものもあれば、話しこむものもあった。このときオーケン教授は一部の学生に向かって、この感激の

瞬間を忘れてはならない、君たちは一地方人にとどまるな、君たちは教養あるドイツ人、普遍の人間なのだ、分散してはならないと檄をとばした。

12時から歌合戦の間とそのとなりの部屋を使って、全員で昼食をとった。教授や来賓も出席した。ともに歌い、杯を重ねて、食事は2時ごろまでつづいた。食事が終わると、ブルシェンたちはふたたび列を組んで、アイゼナハの町へと下りて行った。国民軍兵士とともに市教会のミサに参列したあと教会前のマルクト広場に出て、また歌い氣勢をあげた。イエーナとベルリンの体操家が模範演技を披露した。

夕方6時、ブルシェンたちはヴァルトブルクの向かいにあるヴァルテンベルクへと炬火ををかざしながら登っていった。山上にはかがり火を燃やすために巨大な薪の山が築かれていた。毎年ここでライプツィヒでの戦勝を記念して祝いのかがり火を燃え上がらせているのである。これがこの夜、問題を起こすことになる。最初に演説をしたのはレーディガー (Ludwig Rödiger) である。「危急存亡のときに、われわれに祖国を与えるという約束がなされた。統一された正義の祖国である。しかるに高い代償であがなわれた連邦議会はいまだ開催をみない。…ただひとりの君主だけが君主にふさわしく約束を果たされた」。「ここに解放戦争後の反動に対する幻滅と憤懣がするどい攻撃的な言葉となって、祝祭のなかではじめて爆発した」¹⁷⁾とヴェッセルは見る。レーディガーの演説が終わるころ、夜の冷気があたりをつつんだ。来賓と大部分のブルシェンは山を下りた。イエーナ大学の教授のうちただひとり参加していた宮廷顧問官フリースも退散した。フリースがここで姿を消していたことは、のちに重要となる。

残っていたのは、ブルシェンの一部、もっとも活動的な連中である。数人の学生が古紙のつまった籠を引いてきた。その昔ルターが、破門を迫る教皇レオ十世の勅書を公衆の面前で焼き捨てた故事にならって、非ドイツ的、反民族的と目される書物を焚書の刑に処するというのである。これを実行したのはマースマンであったが、背後にはヤーンの精神があった。ヤーンの提案は祝祭の指導者には反対されていたが、彼に熱狂的に帰依して

いるマースマンによって実行に移されたのである。焚書とはいえ本物の書物が焼かれたのではない。イエーナのある印刷所にあった大量の反故紙が運びこまれ、これが書物の役割をした。表紙に火刑の判決をうける書物の題名が書かれ、火に投ぜられた。そのなかにコッツェブー (August von Kotzebue) の『ドイツ帝国の歴史』やヤーンの体操運動に反対する書物も含まれていた。ところで、これらの書物を焚書に処した若者たちは、その書物の内容についてはほとんど知らなかった。マースマンでさえ、のちに責任を問われることになったとき、はじめて読みはじめたという。書物につづいてプロイセンの槍騎兵が身につけていた胴着、ヘッセン兵の辮髪、ナッサウおよびオーストリアの伍長の指揮杖が火中に投げられた。焚書は予定されていたことではない。承認もされなかったが、結果としてヴァルトブルク祝祭のもっとも重要で、もっとも影響力のある出来事となった。どの演説よりもセンセーションをまきおこした。

祝祭二日目、ブルシェンの大部分は騎士の間に集まった。カロヴェ (Friedrich Wilhelm Carové) が演説をした。ドイツ諸部族は意識の戦線ですべての非ドイツ的なものに対する戦いへと結集すべし、すぐれた精神をもつ大学でこのことははじまらなければならない、民族の単一性、真の自由と純粋な理性的態度への努力が、外国人支配に対する戦いのなかでドイツ民族のところに起こってきたのだとカロヴェは言う。強調されたのは「共通の精神」である。「学生はひとつの規則で仲間全員とひとつとなることによってのみ自由である。ブルシェンシャフトは、共通のころたる兄弟愛と共通の精神たる民族の榮譽でもって、他のすべてのブルシェンシャフトと固く結合しているときにのみ自由である」。すべての学生がひとつになるようにとの燃えるようなアピールで、ハイデルベルクの若き哲学生はその演説を閉じた。ヴェッセルが形式内容ともに祝祭でなされた演説のうち最高であると評価する¹⁸⁾カロヴェの熱弁は、残念ながら、あまり反響を呼ばなかった。結局機関紙発行のみが決定された。

祝祭後すぐに「原則と決議」が起草された。発案者はルーデン、起草に

はリーマンとカール・ミュラーがあたった。そこに謳われているのは、ドイツの統一（ひとつのドイツが存在する、存在するべきで、存在しつづけるべきである）、立憲君主国になるべきこと、ドイツ法典のもとでの平等、秘密警察の廃止、個人財産の安全保証、軍隊にかわる一般兵役義務の導入、発言と出版の自由等であった。「原則と決議」は、祝祭の純粋なる精神を示すことによって、ヴァルトブルク祝祭が政治的に危険とみなされた疑念をはらそうとするものであった。しかしドイツ社会の変革を明確に要求している項目もあって、学生のなかにもあまりにラディカルにすぎる、ブルシェンシャフトの政治化は本来の目的を逸脱するものではないかと思う者もいて、採択されるにはいたらなかった。

祝祭後の処理

ヴァルトブルク祝祭は、焚書というセンセーショナルな事件を引き起こした。諸邦は警戒を強め、ヴァイマルへの介入を試みる。1817年12月にはプロイセン宰相ハルデンベルクとオーストリアのベルリン大使ツイヒャーが、ヴァルトブルクに関する件の全権委任使節としてヴァイマルに派遣される。イエーナに対して断固たる措置をとるようカール・アウグストに迫ろうというのである。カール・アウグストは国務大臣フォン・フリッチュに命じて事の成り行きを詳細に調査させた。その結果、連邦規約や神聖同盟の契約書が焼かれたという報道が誤りであることが判明した。これにもとづいて大公は、祝祭は非政治的なものであったと主張してゆずらず、「公共秩序の侵害」ということはまったく事実無根であるとして諸邦の介入をはねつけた。イエーナ大学フリースが焚書のはじまる前に姿を消していたことは好都合であった。さらに大公はドイツ諸邦に駐在する公使に回状をまわし、ブルシェンシャフトとヴァルトブルク祝祭に対するみずからの立場をいま一度明確にすることによって事態を鎮静化したのである。

ゲーテも鎮静化に協力した。18日以降ブルシェンシャフトが窮地に落ちているのを見たとき、彼は断固として学生の側に立った。ゲーテはツイヒ

ーに学生たちの動きには悪意のないことを説得しようとした。11月末ゲーテはイェーナにレーディガーの訪問をうけたあと、息子宛て書簡でレーディガーが気に入ったことを伝えている。「若者はいくら欠点があるにせよ、それを遅れることなく修正するのは、このうえなく好ましいことだ」¹⁹⁾。レーディガーがゲーテを訪問したときの様子は、ヨハンナ・フロマンの12月15日付息子F・J・フロマン宛て書簡が伝えている。それによると、ゲーテはこのとき黙りこくって冷淡な態度であったが、それは鎮静作用のある粉薬で興奮した若者の頭を冷やしてやろうと思ったからだ。だがフロマンに打ち明けたところでは、本当はレーディガーを抱き寄せてキスをし、「そんなばかなことはするな」と言ってやりたかったのだという²⁰⁾。また別の書簡には「わたしたちはゲーテとすばらしい昼を過ごしました。1時から4時半までテーブルについていたのです！老紳士は見事なおしゃべりをしました。わたしが仕向けたわけではないのですが、彼はみずから（ヴァルトブルク祝祭での）レーディガーの演説のことを話題にしました。あなたもそこにいれば、ゲーテの言ったことに満足したでしょう」²¹⁾とあり、ゲーテがレーディガーに対して好意的であったことを証明している。ゲーテはレーディガーの演説を「二三未熟な点をのぞけば、それ自体としてはよい」と評したのである。そうして「世界中から若者が集まってきて、人生のいかなる状況においても持てる力をすべて傾注するという決意をもって、よきことのためにいっそう固く結びつくということよりすばらしいことがあるだろうか」²²⁾と語った。

しかしながら、ゲーテの同じ時期の書簡は上のフロマンの証言とは反対の内容を伝えている。当時ゲーテはイェーナとヴァイマルの間を行き来する生活を送っていたが、両地での仕事は楽しいものであった。「このように気楽に静かに暮しながら、全ドイツが不快を感じているヴァルトブルクの火災が発するいわしき悪臭が消え去るにまかせています。北東風が吹いてあの臭いが戻ってきて、またしてもわれわれの鼻を刺激することがなければ、ここではもうとうに消え失せていたことでしょうに」。北東風と

は、ハルデンベルクとツイヒーがヴァイマルにやって来たことを指している。ゲーテはさらに、自分がすべてのことを「予見はしていなかったまでも予感はしていた」こと、自分がはっきりわかったことは諫止したのみならず、事がうまくいかぬ場合みながするであろうことを言い当てたこと、したがって自分は無関心でいてもいいのだ、そういうわけでエピクロス神々よろしく静かなる雲間に身を隠したのだ、と書いている²³⁾。ゲーテがヴァルトブルク祝祭から災いが生じると予感していることは、ゲーテを訪問したフリードリヒ・フォン・ミュラーの日記からもうかがえる。それによれば、フォクトに向かってヴァルトブルク祝祭を許可することには同意できないということが喉まで出かかっていたのだが、その言葉を呑み込んだのだとゲーテは語ったという²⁴⁾。

コッツェブー暗殺

1818年1月、ルーデンはある情報を入手する。ヴァイマル在住のアウグスト・フォン・コッツェブーがロシア皇帝アレクサンダー一世に宛てヴァイマルとイエーナの状況を書き送っていたのである。ルーデンはこれを自分の雑誌「ネメジス」に発表した。ヴァイマル政府は間髪を入れずこの号を押収したけれども、すでに見本刷りはイエーナに出回っていたし、やがてルートヴィヒ・ヴィーラントの「フォルクスフロイント」やオーケンの「イージス」に掲載された。ブルシェンシャフトがルーデンに味方し、コッツェブーに対し敵意をいだいたのは言うまでもない。コッツェブーは民衆の怒りの標的となる。コッツェブーはヴァイマルを離れるが、1819年3月23日マンハイムにおいて元イエーナ大学生でブルシェンシャフト会員ザントに暗殺される。

さて、ゲーテとコッツェブーはいかなる関係にあったのだろうか。コッツェブーはみずからが編集する雑誌でゲーテ攻撃の論陣をはる。ゲーテの方でもコッツェブーの文学に限界をみていた。ゲーテとコッツェブーの関係は決してよいものではなかった。それにもかかわらず、ゲーテがヴァ

イマル宮廷劇場の劇場監督を勤めている間に上演した作品のうちコッツェブーは群を抜いて多い。またドイツ全体でみてもコッツェブーの人気は圧倒的であった。これはどういうことだろうか。それは大衆を魅了するコッツェブーの才能をゲーテが認めたからである。とくにその喜劇性を高く評価した²⁵⁾。

才能を認めながらも、やはりゲーテはコッツェブーには好意的ではない。祝祭で焚書されたなかにコッツェブーの書物がいっていたことを知るや、そのよろこびを詩に現している。さらに1817年末から1818年初めにかけてつくられたと推測される詩においては、「わたしはいい気味だと思って、静かに／この敵が自滅していくのを見ている」²⁶⁾と書き、「(世間に)コッツェブーに対する際限のない憎しみがわきおこる。市民も学生もコッツェブーを宿敵とみなして怒り狂っている」²⁷⁾と述べている。しかし実際に暗殺されてみると、その凶行には大きな衝撃を受けた。極端なことには極端に、自由に、圧倒するように、堂々と対処しなければならないとフォン・ミュラーを相手に語っている²⁸⁾。

さて1819年8月、メッテルニヒはカールスバートに主要連邦国の大臣を集め、いわゆる「カールスバートの決議」をおこなった。その結果、学生の秘密結社禁止法がブルシェンシャフトにも適用され、大学は騒動の温床としてきびしい監視下におかれることになる。出版物もすべて事前検閲をうけることになり、さらに中央審問委員会を設置して煽動者の取り締まりをおこなうこととなった。ちなみにゲーテは会議開催中、たまたまカールスバートに滞在し、会議出席者たちと交歓している。

1819年11月26日イエーナのブルシェンシャフトは解散に追い込まれた。フリース、アルントらは大学から追放され、ヤーンは逮捕された。

ゲーテの立場

ブルシェンシャフトに対するゲーテの立場は、ひと口に言えば、イロニーニッシュなものであった。「イロニーニッシュ」とは、対象から距離をとつ

て客観的にこれを眺める態度をいう。ゲーテは、個人的にはブルシェンシャフトの若者たちに共感を寄せている。ヴェツセルヘーフトがイエーナの知人フロマンの親戚ということもそれに一役かっていたであろう。しかし、ブルシェンシャフトという運動およびヴァルトブルク祝祭に対しては疑念をぬぐいきれなかった。

そもそもゲーテは変革を好まない。新しいものに対して、それが既存の秩序をおびやかすのではないかという警戒を怠らない。フランス革命時には、「フランス主義がこの混乱の日々に、かつてノルター主義がそうしたように、静かな教養を追いはらう」²⁹⁾と詠い、時を経て解放戦争時にも保守的態度をくずすことはなかった。ゲーテはコサック兵が入ってくるよりもフランス兵が残っていた方がましだと考える。1814年4月9日同盟軍はパリを占領したが、「ゲーテはわたしたちの今の熱狂を共にすることはまったくないようです。彼のところでは政治のことを話題にははいけません。…彼は新聞を読まないのです」³⁰⁾。そしてまた、ザクセン＝ヴァイマル＝アイゼナハ大公国憲法に明記された出版の自由に対しては、「神聖なる出版の自由は、君たちに／どんな利益、利得、結実を与えてくれたのか／その確かな目に見えるものとして君たちがもっているのは、／世論のふかい軽蔑ではないか」³¹⁾という警句を残している。

歴史のそのときどきの局面に対して、けっしてそれに没入することなく、冷静にそれを観察している。自分の足下の基盤が生涯つづくものと思っていられないゲーテは、実際には苦勞して新しいものと折り合っていかなければならなかった³²⁾。世の中の変化の外にいかにして自分の立場をきずくか、その武器がイロニーだったのではあるまいか。

ブルシェンシャフトに関してもゲーテのこの態度は一貫している。個人には好意をもって接し、外圧に向かってはこれを守りつつも、ブルシェンシャフト運動というひとつの歴史現象からは距離をとっている。共感と警戒という相反する要素がゲーテの内にはあっては矛盾していないのである。

参考文献

- Albrecht, Wolfgang: Hier wohn' ich nun, Liebste, … Die Wartburg in Literatur und Kunst von Goethe bis Wagner 1749-1849. Eisenach, 1986.
- Dellingshausen, Erica von: Die Wartburg. Ein Ort geistesgeschichtlicher Entwicklungen. Stuttgart, 1983.
- Fichte, Johann Gottlieb: Reden an die deutsche Nation. Hamburg, 1978.
- Goethes Gespräche. Eine Sammlung zeitgenössischer Berichte aus seinem Umgang. Auf Grund der Ausgabe und des Nachlasses von Flodoard Freiherrn von Biedermann. Ergänzt und herausgegeben von Wolfgang Herwig. Bd.1-5. München, 1998.
- Goethes Leben von Tag zu Tag. Eine dokumentarische Chronik von Robert Steiger und Angelika Reimann. Bd.IV, Zürich/München, 1993.
- Johann Wolfgang Goethe. Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens. Münchner Ausgabe. Bd.III.L, 1998.
- Mann, Thomas: Gesammelte Werke in dreizehn Bänden. Frankfurt/M. 1974.
- Scheidig, Walther: Goethe und die Wartburg. Weimar, 1961.
- Schröder, Willi: Die Gründung der Jenaer Burschenschaft, das Wartburgfest und die Turnbewegung 1815-1819. In: Studentische Burschenschaften und bürgerliche Umwälzung. Zum 175. Jahrestag des Wartburgfestes. Hrsg. von Helmut Asmus. Berlin, 1992.
- Steiger, Günther: Aufbruch. Urburschenschaft und Wartburgfest. Leipzig/Jena/Berlin, 1967.
- Tümmler, Hans: Carl August von Weimar, Goethes Freund. Eine vorwiegend politische Biographie. Stuttgart, 1978.
- Tümmler, Hans: Goethe – Burschenschaft – Wartburgfest. In: 150 Jahre Burschenschaft auf dem Burgkeller. Festschrift zur 150. Wiederkehr der Gründung der Burschenschaft in Jena. Hrsg. von Jeanische Burschenschaft, bearbeitet von Peter Kaupp und Reinhard Stegmann. 1965.
- Wessel, Klaus: Das Wartburgfest der deutschen Burschenschaft. Eisenach, 1954.
- マックス・フォン・ペーン／飯塚信雄他訳『ビーダーマイヤー時代—ドイツ十九世紀前半の文化と社会』三修社、1993年。
- リヒャルト・フリーデントール／平野雅史他訳『ゲーテ—その生涯と時代—』（下）講談社、昭和54年。
- 潮木守一『ドイツの大学—文化史的考察—』講談社、1992年。
- 小島康男「ゲーテとコッツェプー—《通俗劇》理解のための覚え書き—」、『ドイツ文学における古典と現代—登張正實先生古稀記念論文集—』第三書房、1988年所収。
- 坂井栄八郎『ゲーテとその時代』朝日新聞社、1996年。

- 成瀬 治・山田欣吾・木村靖二編『ドイツ史2—1648年～1890年—』山川出版社、1996年。
 前川道介『楽しいビーダーマイヤー—19世紀ドイツ文化史研究—』図書刊行会、1993年。
 村岡 哲『近代ドイツの精神と歴史』創文社、昭和56年。

註

- 1) Fichte, S.12.
- 2) フィヒテとヤーンがブルシェンシャフトに与えた思想的影響については稿を改めてくわしく論じたい。この問題は、村岡『近代ドイツの精神と歴史』が扱っている。
- 3) この節は主として『ドイツ史』218頁以下を参照した。
- 4) その結果、父は非難され、息子は軽蔑されたとトーマス・マンは小説『ヴァイマルのロッセ』に書いている。彼の態度はルーデンのような愛国者から見れば、ぞっとするほど冷たく、無関心なものであった。(Mann, Bd.II, S509f.)
- 5) Goethes Gespräche, Bd.2, S.869.トーマス・マンは、当時のドイツにあって時代に適応しなかったゲーテを非ドイツ的との非難から擁護する人々がほかならぬ愛国的精神の持ち主のなかにいたとして、ヤーン、フォン・シュタイン、アルント、ファルンハーゲン・フォン・エンゼの名を挙げている。(Mann, Bd.IX, S.357f.)
- 6) Münchner Ausgabe, S.539f.
- 7) Maximen und Reflexionen.
- 8) 結局、カール・アウグストはフリッチュやゲルスドルフの助言をいれて、ゲーテにはしたがわなかった。(Tümmler: Carl August, 275ff.)
- 9) Münchner Ausgabe, S.220.
- 10) Tümmler: Goethe-Burschenschaft-Wartburgfest. 138f.
- 11) Gespräche mit Eckermann. 27.3.1831, 9.7.1827.
- 12) 村岡、130頁。
- 13) An Voigt, 5.6.1817.
- 14) An Willemer, 17.10.1817.
- 15) An Knebel, 9.10.1817.
- 16) リーマンの演説はSteigerの96頁と97頁の間に掲載されている。
- 17) Wessel, S.22.
- 18) Wessel, S.24.
- 19) An August von Goethe, 28.11.1817.
- 20) Goethes Gespräche. Bd.3, Erster Teil, S.38f.
- 21) a.a.O.
- 22) a.a.O.
- 23) An Zelter, 16.12.1817.

- 24) Goethes Gespräche. Bd.3, Erster Teil, S.47.
- 25) 小島論文による。
- 26) Münchner Ausgabe, S.195.
- 27) An Voigt, 27.1.1818. Münchner Ausgabe, S.541.
- 28) Goethes Gespräche. Bd.3, Erster Teil, S.120.
- 29) Vier Jahreszeiten 63.
- 30) Frau von Stein an ihren Sohn. Goethes Leben von Tag zu Tag. Bd.IV, S.54.
- 31) Zahmen Xenien II.
- 32) トーマス・マンは『非政治的人間の考察』執筆時、みずからも保守的態度をとりつつ、このようなゲーテに慰めを見出している。(Mann, Bd. XII, S.216.)

Die Burschenschaft und Goethe

Satoru TANAKA

In der vorliegenden Arbeit wird die Entstehung der deutschen Burschenschaft, die in Japan noch ziemlich unbekannt ist, und das Wartburgfest, das 1817 von ihr veranstaltet wurde, dargestellt. Zugleich wird versucht, das Verhältnis Goethes zu dieser studentischen Bewegung anhand seiner Briefe und der Äußerungen seiner Zeitgenossen zu untersuchen.

Die Burschenschaft wurde 1815 in Jena gegründet. Die Studenten, die vom Befreiungskrieg im Jahre 1813 heimkehrten, waren die Führer der Verbindung. Sie forderten die Einheit Deutschlands, deren Verwirklichung die Fürsten während des Krieges versprochen, aber nicht erfüllten. Goethe war den Studenten freundlich gesinnt, hatte mit ihnen persönlich Kontakt, weil manche Burschenschafter aus Familien seines Bekanntenkreises in Jena stammten. Andererseits stand aber Goethe, der etwas Neues immer als gefährlich für die bestehende Ordnung empfand, der Burschenschaft zweifelnd gegenüber.

Am 18. Oktober 1817 fand das Wartburgfest, das Reformationsjubiläum und die Siegesfeier der Völkerschlacht bei Leipzig statt. Am Abend des Tages wurden von einigen Festteilnehmern reaktionäre Schriften verbrannt, darunter auch Kotzebues „Geschichte des deutschen Reiches“. Dieser Vorfall bot den konservativen Staaten, vor allem Preußen und Österreich, den besten Vorwand zum Eingreifen. Gegen diesen Angriff verteidigte die Weimarer Regierung die Festteilnehmer, und auch Goethe war daran beteiligt.

Goethe sind die jungen Burschenschafter zwar sympathisch, aber er ahnt den unglücklichen Verlauf der Bewegung. Nach der Ermordung

Kotzebues und den Karlsbader Beschlüssen bricht er die Beziehungen zur Burschenschaft ab. Der große Dichter, der vieles hinter sich gebracht hat, steht der Bewegung ironisch gegenüber: er hält Abstand vom zeitlichen Geschehen.